

走れ思い出

山線軌道

》1《

「昔、吉小牧と支笏湖の間を軽便鉄道が走っていた。紙の工場が出来るとき、発電所の機械や資材を運んだ。あとからは、働く人や家族、木材、鉱石、そして山菜とり、チップ釣りの街の人も運んだ。そして、それは「山線」とよばれていた」(版画集「山線軌道」より)。吉小牧在住の画家・能登正智さんが版画集「山線軌道」を出し、人々を懐かしがらせた。山線が廃止されてすでに三十年を超える。ページをめくりながら、そこに生きた人々の思い出を聞いた。

私は昭和二年に山線に入りました。実を言えば、浜小牧軽便鉄道」のものでし線に入って機関士になりました。線に入りましたが、人が余っていたので、人が余っていたようで、入れませんでした。

私が入った当時の山線は、線路工事(保線係)が六人ぐらいしかおらず、あとの保線作業は中村組がやっていた。駅と機関庫には十人ぐらいで、機関士は三人ぐらい。全部で三十人ぐらいでした。千歳鉱山の操業が活発になって金鉱石の運搬が忙しくなった昭和十一年以降になると、山線にも人がどんどん入って来て、一番多い時には百五十人ぐらいにもなりました。

山線のほかに浜線がありました。その駅は今の王子病院のあたりです。山線も

浜線も同じ王子製紙の「吉小牧軽便鉄道」のものでしたが、山線が王子の専用線だったのに対し、浜線は営業線で、国に買いあげられました(昭和二年)。それで従業員もたくさんいたのです。

しかし、もともとと同じ王子の経営だったので、山線が忙しくなると駅長は浜線に電話で応援を頼み、機関士に来てもらうのです。浜線の機関車は大きく、昭和四年から広軌本線に切り替え(これに比べて山線の機関車は小さく、大きな水タンクを背負っていたため、「カメノコ」と呼ばれていました。しかし、外国製(米國製)と違って、私たちがノナが高かったのです。



浜線から機関士が応援



版画・能登正智さん(吉小牧市糸井389-9)

「カメノコ」外国製機 と呼ばれても 関車と鼻高々

は、吉小牧の駅(山線駅) 国鉄線路を越えて北側にあり、建物や物置のような感じ、機がひとつに長いですが

一つといったとき、一般の人が乗り始めたのはもう少し後からだったので、待合室などはありませんでした。

吉小牧市美園町三ノ三
嘉屋 一雄さん(七〇)談

△山線▽
×モ
王子製紙吉小牧工場建設の第一歩として千歳川に発電所を建設するため、資材運搬に明治四十一年四月、吉小牧からの馬車軌道が完成。直後、重量八トの小蒸気機関車を米國から輸入し、同年八月に王子軽便鉄道として運転開始。昭和二十六年まで「山線」として親しまれた。